

令和 4 年度

家庭系及び事業系一般廃棄物組成分析調査について

令和5年2月

苫小牧市ごみ推進課

--- 目 次 ---

1.	目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P 1
2.	調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・	P 1
	（１）家庭系一般廃棄物・・・・・・・・	P 1
	①調査対象	
	②調査方法（戸別収集は若干異なる）	
	③分析項目	
	（２）事業系一般廃棄物・・・・・・・・	P 1
	①調査対象	
	②調査方法	
	③分析項目	
3.	家庭ごみ分析結果	
	（１）燃やせるごみ・・・・・・・・	P 2
	（２）燃やせないごみ・・・・・・・・	P 3
	（３）プラスチック・・・・・・・・	P 4
	（４）紙類・・・・・・・・	P 5
	（５）資源物・・・・・・・・	P 6
4.	事業系ごみ分析結果・・・・・・・・	P 7
5.	まとめ・・・・・・・・	P 8

1. 目的

家庭系一般廃棄物及び事業系一般廃棄物の排出状況や、資源化可能物の混入量の把握を行い、今後の廃棄物減量の施策検討の基礎資料とすることを目的とする。

2. 調査の概要

(1) 家庭系一般廃棄物

①調査対象

R2、3年度はコロナ禍の影響により組成分析業務を行っていないため、R4年度の調査対象地区は R1 年度と条件の同じ地区を対象とした。

なお、令和元年度は、共同住宅が多い町、公住が多い町、一戸建て住宅と高齢者世帯が多い町、若年世帯が多い町、戸別収集地区を対象に、市内5町を選定した。

	共同住宅が多い町	公住が多い町	一戸建て住宅と高齢者世帯が多い町	若年世帯が多い町	戸別収集地区
R1	拓勇西町	末広町	栄・寿町	ウトナイ南	船見町
R4	拓勇西町	末広町	栄・寿町	ウトナイ南	船見町

②調査方法（戸別収集は若干異なる）

・可燃物・不燃物

分析対象となる町のごみステーションのうち、指定した 15 ヶ所から指定ごみ袋 5 ℓ、10 ℓ、20 ℓ、30 ℓ、40 ℓ と、有害ごみ・おむつ類をそれぞれ平均的な量で合計 100 k g 程度になるように回収する。

・プラスチック・紙類

分析対象となる町のごみステーションのうち、市が指定する 15 ヶ所からそれぞれ標準的、平均的なごみ袋を2袋ずつ回収する。

・資源物（缶・びん・ペットボトル・紙パック）

1 ヶ所のステーションに出ているごみの袋を全て回収する。

③分析項目

(1)厨芥類 (2)布類 (3)木類 (4)ゴム・皮革類 (5)紙おむつ (6)紙類 (7)有害ごみ (8)感染ごみ
(9)スチール缶 (10)アルミ缶 (11)ペットボトル (12)ガラス類 (13)プラスチック類 (14)その他の不燃物

(2) 事業系一般廃棄物

①調査対象

沼ノ端クリーンセンターへ搬入された事業系一般廃棄物を対象とする。

②調査方法

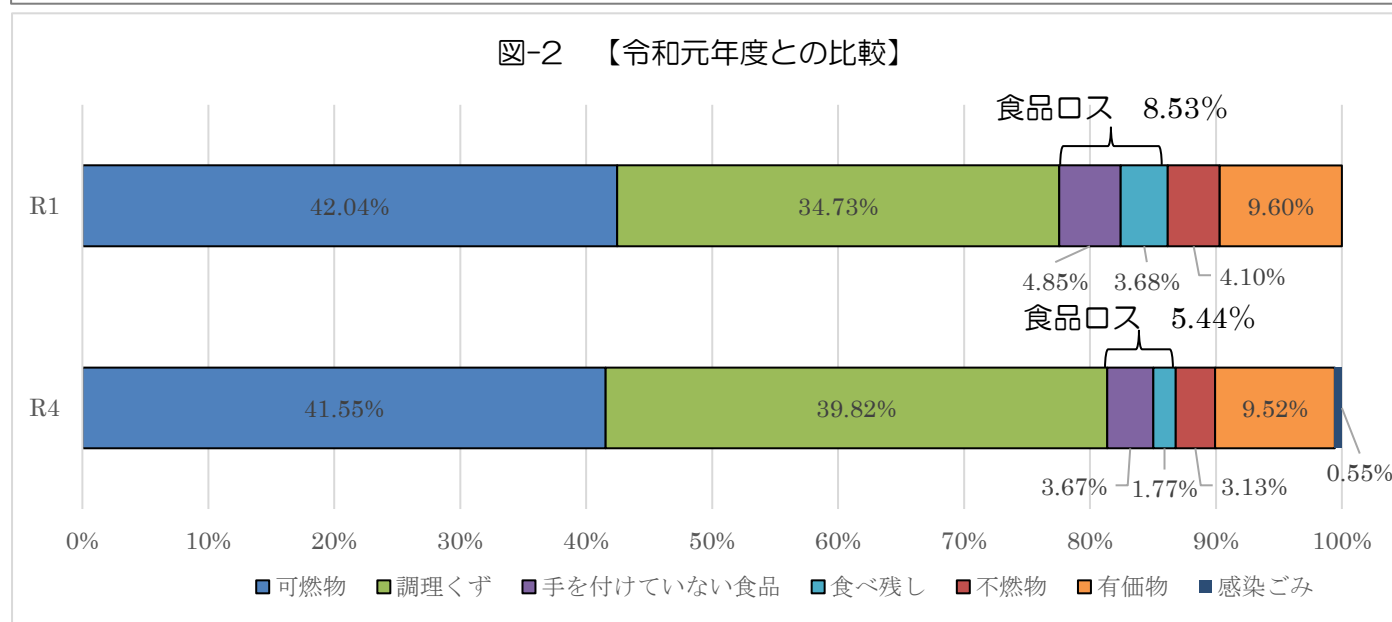
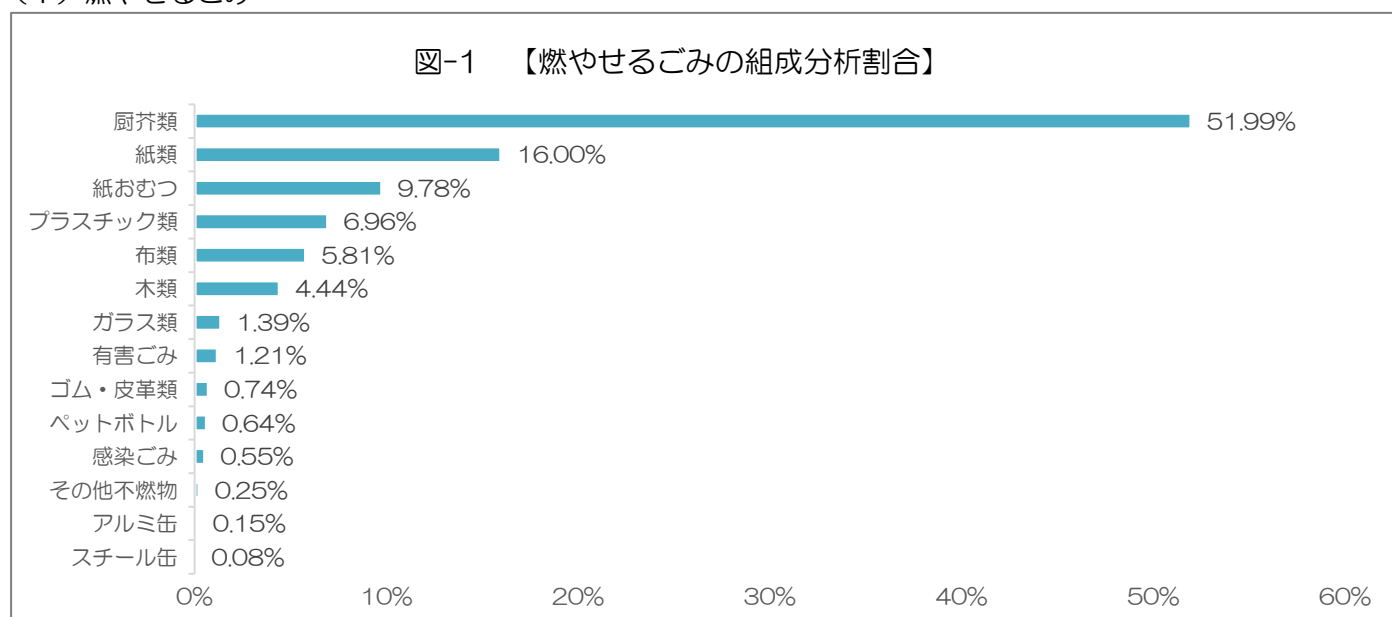
事業系一般廃棄物の搬入ピット内に堆積している廃棄物を攪拌し、100 k g 程度を分析用試料とする。

③分析項目

家庭系一般廃棄物と同項目。

3. 家庭ごみの分析結果

(1) 燃やせるごみ



燃やせるごみの分析結果は、令和元年度に行った分析結果と大きく変わることはなかったが、今年度についても厨芥類の割合が最も高く、次いで紙類、紙おむつという結果となった。

厨芥類の食品ロスについては、8.53%から5.44%に減少した。手を付けていない食品については、主にお菓子やレトルト食品などの賞味期限が割と長い物が捨てられる傾向にあった。なお、調理くずは34.73%から39.82%に増加となった。

禁忌品については、金属性のかごなどが捨てられており、おむつ類ではペットシートが混入していた。マスクの排出割合は全体の0.55%に留まった。

(2) 燃やせないごみ

図-3 【燃やせないごみの組成分析割合】

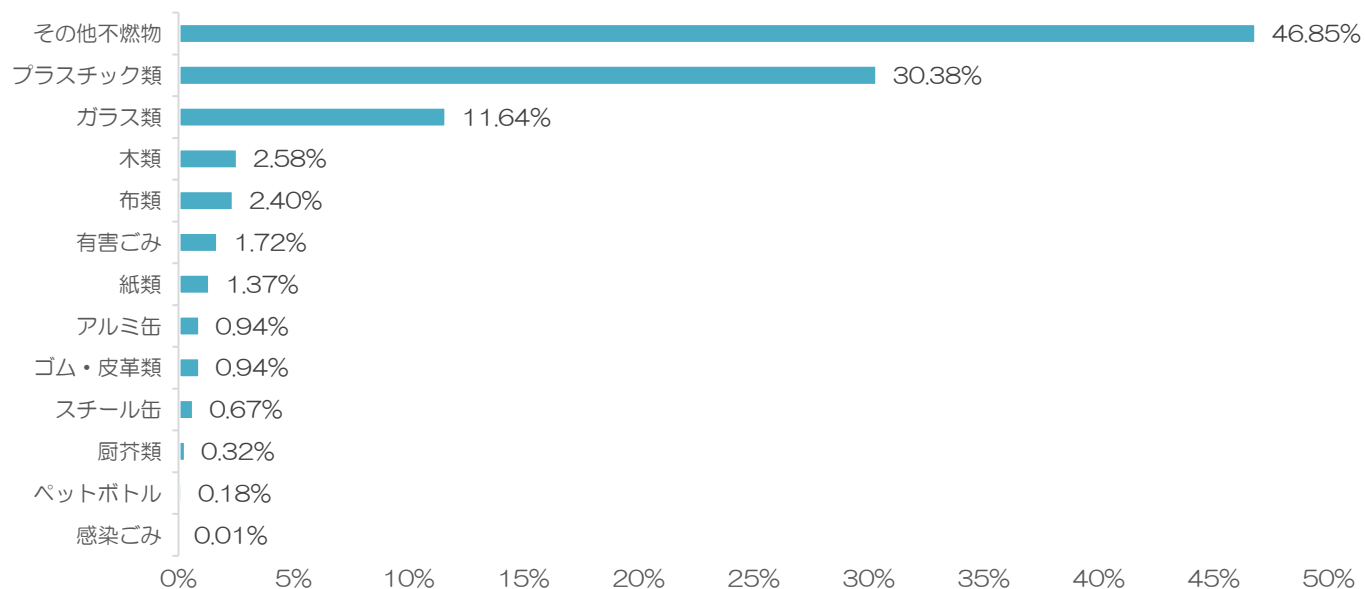
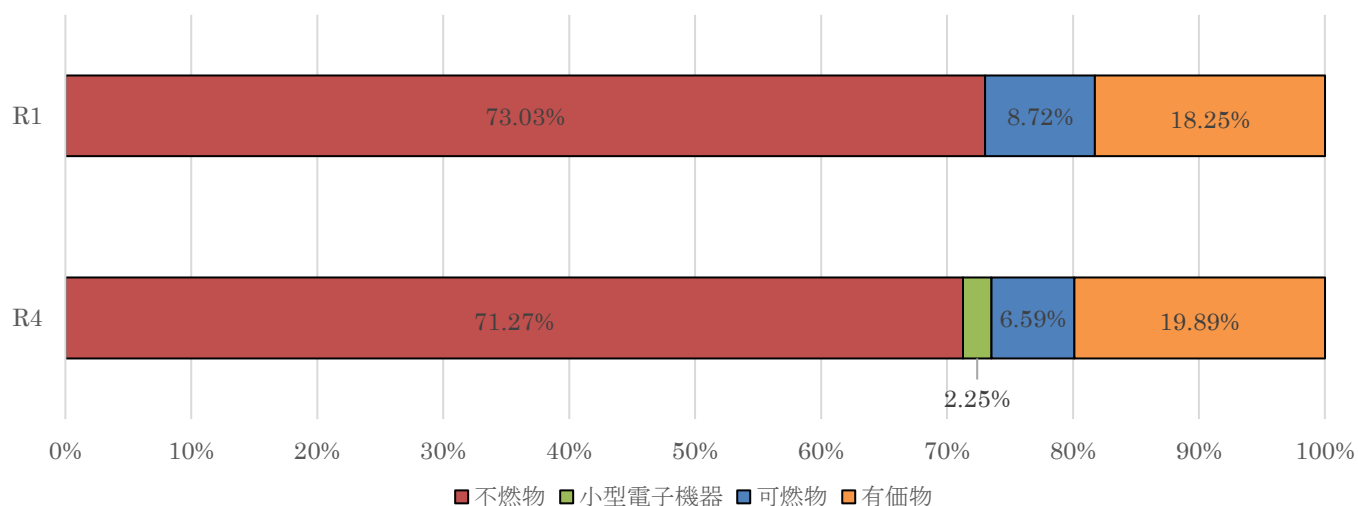


図-4 【令和元年度との比較】



燃やせないごみの組成分析結果は、その他の不燃物が 46.85%、次いでプラスチック類が 30.38%となった。今年度は食器類やハンガー等が最も多く、コロナ禍の影響による片づけごみのものと推測している。

可燃物の割合が 8.72%から 6.59%に減少した。一方、有価物の割合は令和元年度の 18.25%から令和 4 年度では 19.89%となり、若干増加した。

(3) プラスチック

図-5 【プラスチック組成分析割合】

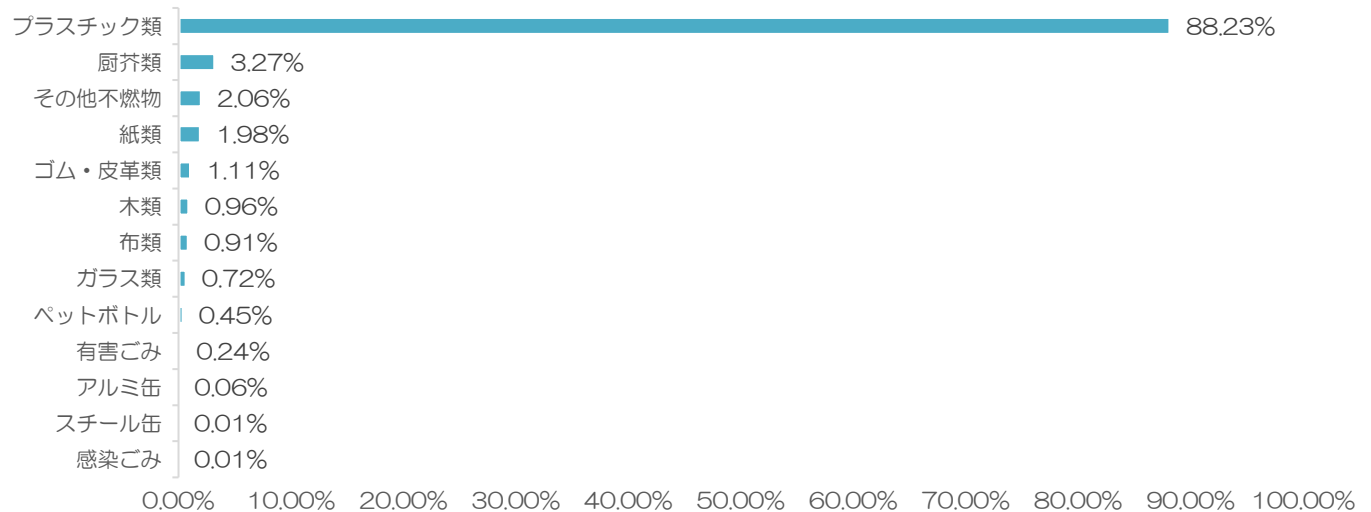
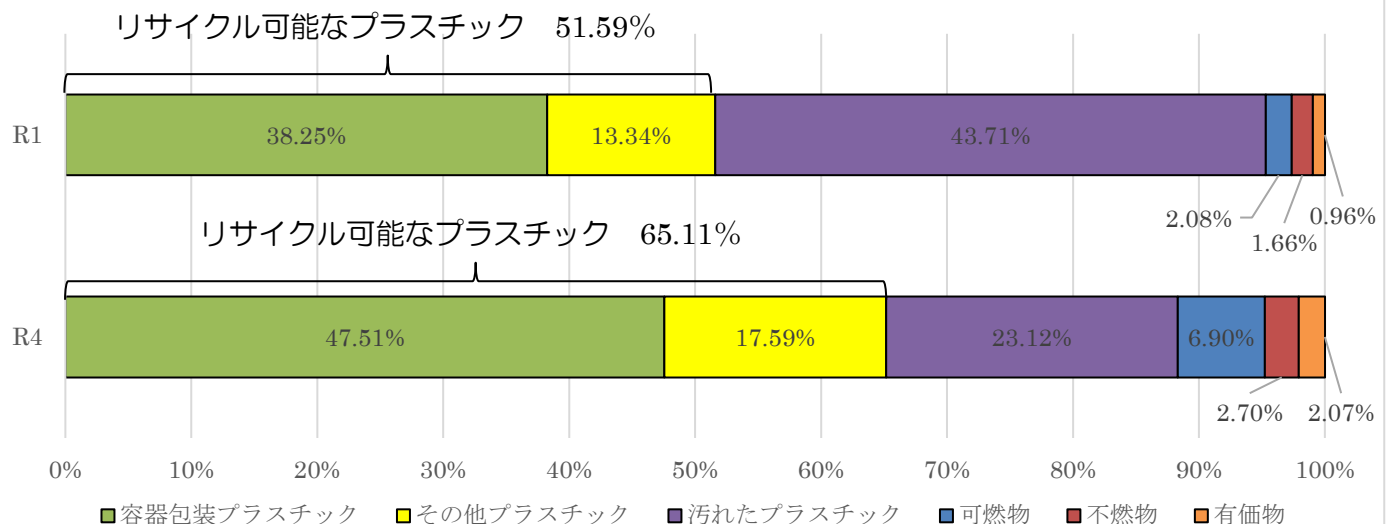


図-6 【令和元年度との比較】



プラスチックの組成分析結果は、プラスチック類が全体の約9割を占めており、リサイクル可能なプラスチックが令和元年度では、51.59%であったが、令和4年度では65.11%と増加し、汚れたプラスチックは43.71%から23.12%に減少した。しかし、可燃物、不燃物及び有価物の混入率が令和元年度と比較すると増加した。

(4) 紙類

図-7 【紙類組成分析割合】

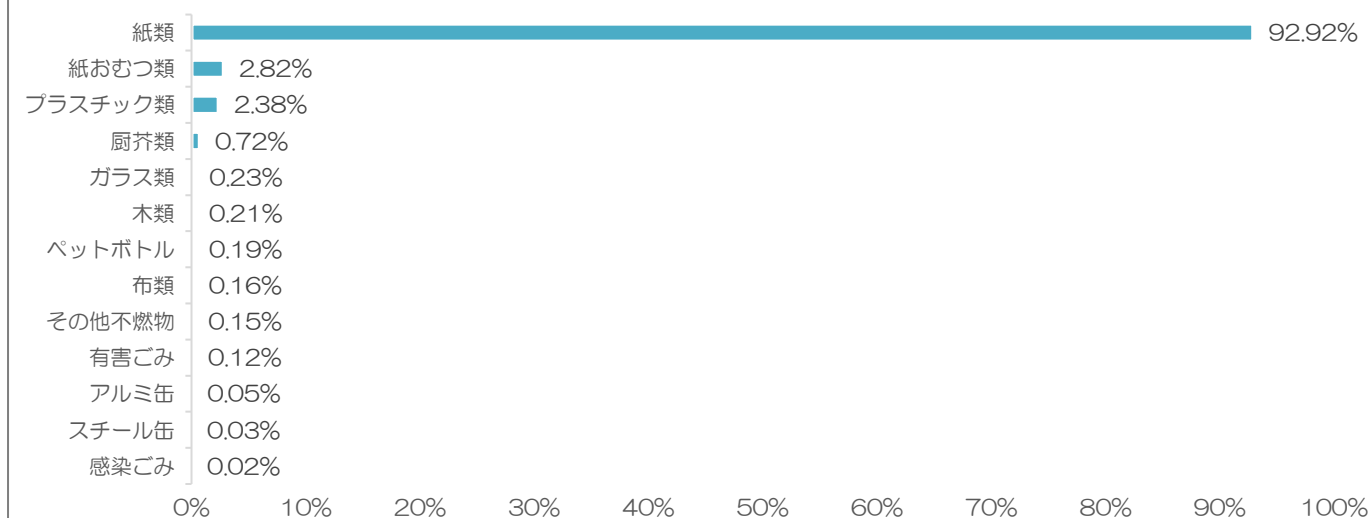
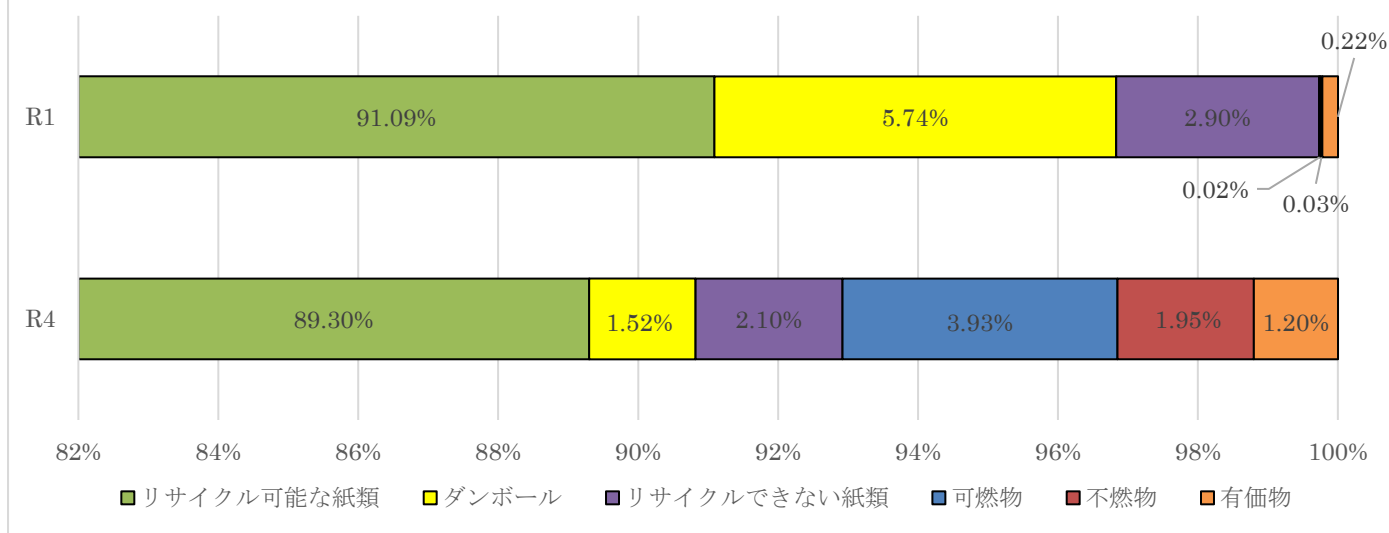


図-8 【令和元年度との比較】



紙類の組成分析結果は、紙類が 92.92%、次いで紙おむつ類が 2.82%となった。令和元年度と比較すると、リサイクル可能な紙類が令和元年は 91.09%で、令和 4 年度は 89.30%とわずかに減少したが、前回同様 9 割近くはきちんとした分別がされている結果となった。

可燃物、不燃物及び有価物が令和元年度と比べて増加となったが、ダンボールの混入が減った。可燃物の内訳としては、紙おむつやティッシュパーパー等の汚れたものを混ぜて排出されていた。

(5) 資源物

図-9 【資源物組成分析割合】

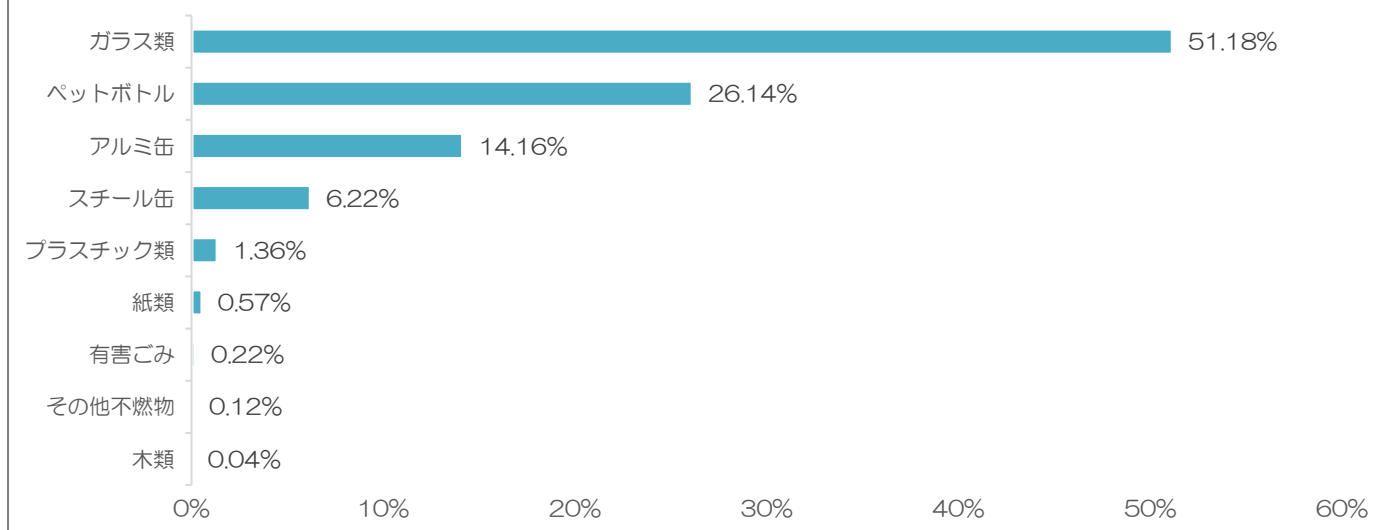
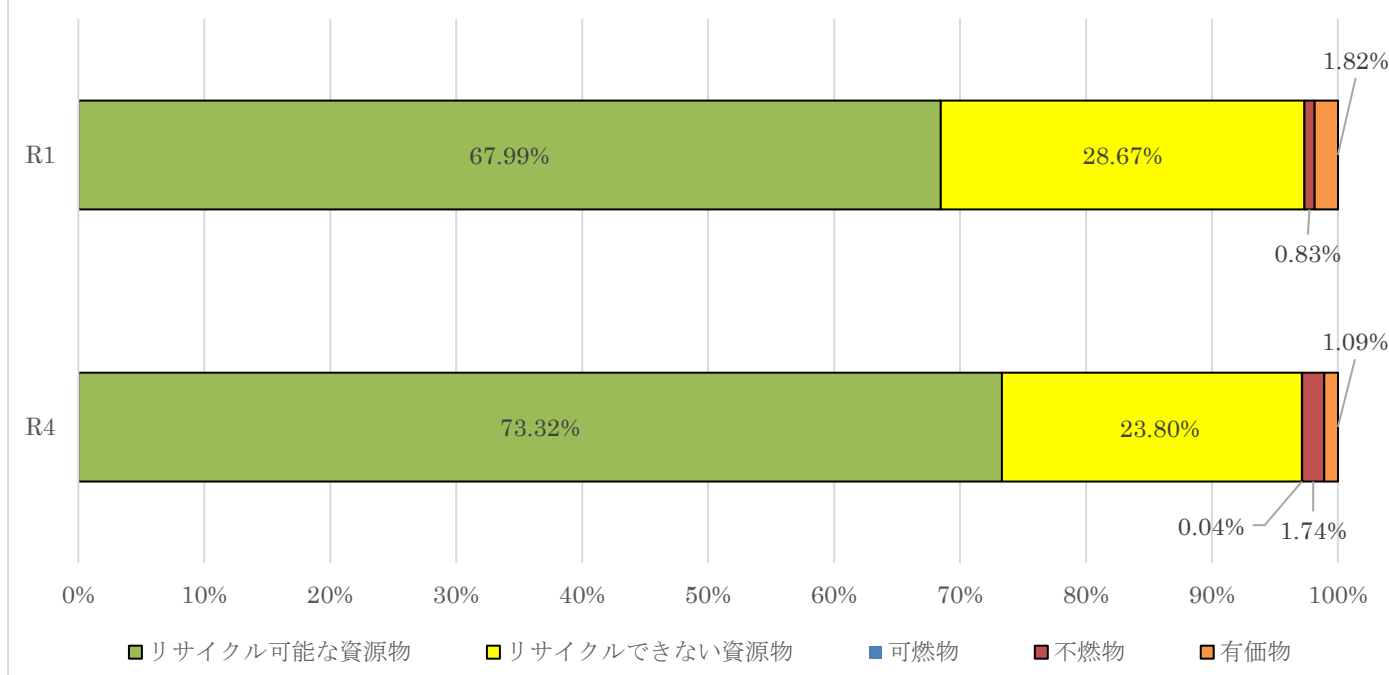
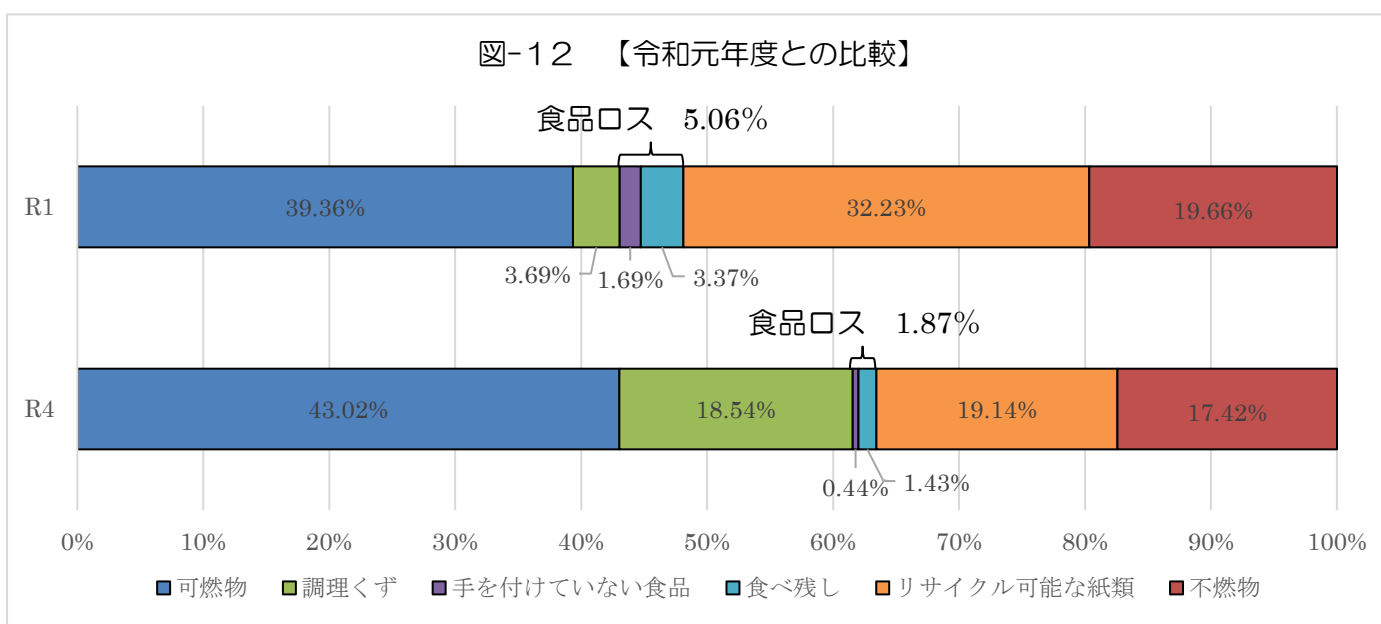
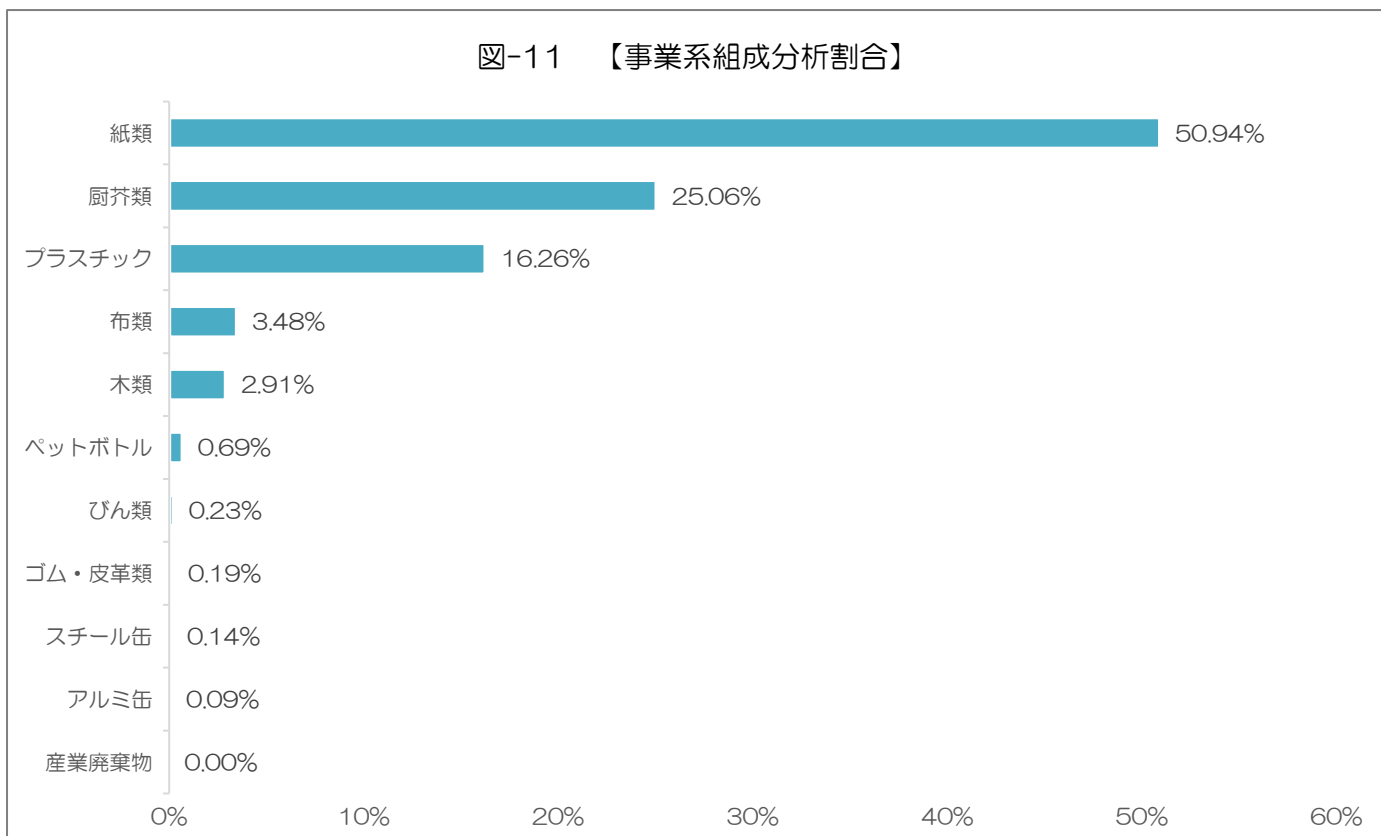


図-10 【令和元年度との比較】



資源物の分析結果は、リサイクルが可能な資源物が令和元年度は67.99%であったが、令和4年度は73.32%と増加し、汚れた資源物やプラスチック、紙類等の本来正しく排出されればリサイクル可能な有価物の混入が減少した。一方、禁忌品として若干の可燃物及び不燃物が増加した。

4. 事業系ごみ分析結果



事業系ごみの組成分析結果は、リサイクル可能な紙類が 32.23%から 19.14%に減少し、食品ロスも 5.06%から 1.87%に減少した。また、本来、産業廃棄物としての処理がされなければならない不燃物については、19.66%から 17.42%に減少した。

しかし、調理くずについては、令和元年度に 3.69%であったものが、令和 4 年度は 18.54%と、約5倍の増となった。この件について、収集業者に聞き取りを行ったところ、大型店のごみの増加が年末にかけて著しいとのことであり、事業活動が再開されたことにより、フードコート等の回転率が上がったものかと推測する。

5. まとめ

【家庭ごみについて】

- ・燃やせるごみの食品ロスが 8.53%から 5.44%に減少した。
- ・燃やせないごみの可燃物が 8.72%から 6.59%に減少した。
- ・プラスチックのリサイクル可能なプラスチックが 51.59%から 65.11%に増加した。
- ・紙類のダンボールが 2.90%から 2.10%に減少した。
- ・資源物のリサイクルが可能な資源物が 67.99%から 73.32%に増加した。

●今後の課題

- ・燃やせるごみでは、調理くずが 34.73%から 39.82%に増加した。
- ・燃やせないごみでは、有価物が 18.25%から 19.89%に増加した。
- ・プラスチック、紙類、資源物は禁忌品の混入が令和元年度より増加した。

【事業系ごみについて】

- ・リサイクル可能な紙類が 32.23%から 19.14%に減少した。
- ・食品ロスが 5.06%から 1.87%に減少した。
- ・産業廃棄物の混入が 19.66%から 17.42%に減少した。

●今後の課題

- ・調理くずの割合が令和元年度の約5倍増となった。

【今後の組成分析調査のあり方について】

今後の組成分析調査において、家庭ごみに関しては、戸建住宅と共同住宅、若年世帯と高齢世帯など、それぞれの組成を調査して実態を探り、それらに応じた施策のチェック及び対策を講じていくことも有効と考える。